

動向

中国における中日語彙対照研究の動向

彭 広 陸

〈北京大学〉

本稿は、中国における中日対照言語学の一環としての中日語彙対照研究の現況を概観するものである。取り上げる対象は、2009～2011年の間に中国大陸で公にされた中国人研究者による論述（シンポジウムの予稿集に掲載されたものも含む）に限定することとする。とはいえ、筆者は関係の論文などに全部目を通したわけではないので、言及する対象に漏れが多々あることを断っておきたい。なお、日本人や外国人の研究者によるものは対象外とする。

中国における中日対照言語学の研究は、近年、日本語研究者や中国語研究者の成長と増加によって大きな発展を見せている。中日語彙対照研究も、中日文法対照研究に次いで、注目の研究分野となっている。2009年8月に、中国で「漢日対比語言学研究（協作）会」という学会が発足し、中日対照研究に一層拍車がかかることになった。以下に取り上げるものの多くは、その学会の年に一回の全国大会で発表されたものである。いくつかの研究テーマに分けて中日語彙対照研究の成果をスケッチしてみたいと思う。

1. 語構成の対照研究

紀曉晶「日語字音的自由黏着與構詞——兼與漢語語素對比」（『漢日対比語言学研究（協作）会成立大会暨第1届漢日対比語言学研讨会資料集』2009）は、自由形態素（free morpheme）・拘束形態素（bound morpheme）と語構成

との関係の観点から日本語の字音形態素と中国語の形態素を比較し、両者の相違を明らかにした。

修徳健「〈略熟語〉の中日比較——教科書記述への一提言」(『漢日対比語言学研究(協作)会成立大会暨第1届漢日対比語言学研討会資料集』2009)は、「出入口」のような単語を「略熟語」と呼んで、中日両語におけるそれを比較している。

彭広陸「中日同素語再考」(『漢日対比語言学研究(協作)会成立大会暨第1届漢日対比語言学研討会資料集』2009)は、「校园(中)―校庭(日)・长处(中)―長所(日)・改建(中)―改築(日)・词形(中)―語形(日)・窃听(中)―盜聴(日)」のような、「中国語と日本語の間に見られる、類義の形態素による、意味的に対応する語彙」のことを「中日同素語」と呼んでその諸相を考察した。

邵艶紅「近代中日両国語言三字詞対比」(『漢日語言対比研究論叢』第1輯、北京大学出版社、2010)は、『近現代漢語新語詞源詞典』(2001)から三字語を783語、日本明治初期の啓蒙的雑誌『明六雑誌』から三字漢語を748語それぞれ抽出し、両者の形成過程・品詞性・語形成などの面から比較している。

邱根成「論双漢字動詞在日漢中的差異」(『漢日語言対比研究論叢』第1輯、北京大学出版社、2010)は、中日両語における二字動詞の相違を明らかにした。

鄧牧「語構成から見る日本漢語における二字逆順語」(『漢日語言対比研究論叢』第1輯、北京大学出版社、2010)は、日本語における二字逆順語を語構成と意味関係との関連から考察している。

王健「漢日結果複合動詞構成要素的対比研究——以「動詞+動詞」型為研究対象」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)は、中日両国語における、結果を表す複合動詞を比較した。その結果、中国語の場合は前項動詞が後項動詞よりずっと発達しているのに対し、日本語の場合は、前項動詞と後項動詞の間に量的な差があまり見られないということが明らかになった。

中日同形語の研究として、曹春玲「中日同形異義語の比較研究」(『第3届

漢日対比語言学研究会資料集』2011) を挙げることができる。

2. 個別語の対照研究

個別語の対照研究はほとんど語義の比較に集中しているが、特に認知言語学の理論を運用して考察を行うものが多い。

陳昌柏「中日空間辞の語義と機能拡張に関する対照研究——「上(ウエ)」を中心として」(『漢日対比語言学研究(協作)会成立大会暨第1届漢日対比語言学研究会資料集』2009)は、中日両言語においてよく使われる空間辞の“上”を中核として比較・対照している。

徐蓮「漢日語「深」的認知比較」(『漢日対比語言学研究(協作)会成立大会暨第1届漢日対比語言学研究会資料集』2009)は、プロトタイプ・イメージスキーマ・メタファーなどの認知言語学の理論を運用して、日本語の「深(シン)」と中国語の“深(shēn)”の意味拡張のルートを究明し、さらに両者の各意味項目における使用頻度を比較した。

董玉婷・劉巖「日本語助数詞の「本」に対応する中国語量詞——具象的な「細長いもの」のプロトタイプをめぐる」(『漢日対比語言学研究(協作)会成立大会暨第1届漢日対比語言学研究会資料集』2009)は、細長いものを表す日本語助数詞の「本」に対応する中国語量詞を取り上げて、両者の区切り方や分類の相違を明らかにした。

譙燕「「人々」と「人たち」の複数性——中国語の“人人”“人们”との対照を兼ねて」(『日本学研究』20、学苑出版社、2010)は、類義語である「人々」と「人たち」の意味用法を比較し、さらに中国語の“人人”“人们”との対応関係を究明した。

閻利華「漢語的“前”和日語「前」的認知意義比較研究」(『日語学習與研究』2010年第5号)は認知言語学的観点から、中国語の“前”と日本語の「前」を比較し、両者の共通点と相違点を明らかにした。

王静「漢日基本味覚形容詞的隱喻現象対比研究——以漢日甜味詞為例」(『日語学習與研究』2011年第1号)は、中国語の“甜”と日本語の「甘い」

を例に、メタファーによる意味拡張の際、両言語の背後にある文化的相違によって、両者の意味がずれてしまっている現象を考察している。

他には、董璐「日中両言語における「子」の諸相」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)、時江涛「漢語接尾辞「～式」に関する日中対照研究」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)、王冲「多義動詞「切る」の日中比較研究」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)や張興「日本語の「深い・浅い」と中国語の“深・浅”との意味対照について」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)、葛婧「關於“亏”的漢日比較研究」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)、曹紅荃「中国語“通”と日本語「通る、通す、通じる、通う」の対照研究——翻訳調査を利用して」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)、郭木蘭「關於“茶碗”的漢日対比」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)なども見られる。

一方では、語義の比較研究として、徐宏亮「關於日漢多義詞語義擴展的対比考察」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)を挙げるができる。

3. イディオムの対照研究

呉琳「「怒り」を表す慣用句の使用頻度についての日中対照研究」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)は、「使用語彙」と「理解語彙」になぞらえて慣用句を「使用慣用句」と「理解慣用句」に分けた上で、「怒り」を表す慣用句を例に、中国語母語話者と日本語母語話者を対象にアンケート調査を行った。その結果、次のような相違点が明らかになった。①日本語の慣用句は中国語と比べると「使用慣用句」が少なく、「理解慣用句」やあまり周知されていない慣用句が多いこと。②日本語の場合、年齢の高い世代ほど使用頻度が高いという傾向が見られ、中国語ではそのような年齢差は見られないこと。③中国語では地域によって使用頻度に差のある慣用句が存在する一方で、日本語の慣用句は地域による差が今回の調査では認められないこと。

他には、王雪「日本語と中国語における「酒」の諺から見た取り合わせ

語句の対照考察」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)や李蓮花「日中両語における「動物名」による慣用表現の意味分析——犬、猫を中心に」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)や統三義「“咬牙切齿”と「歯を食いしばる」の対照研究」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)などを挙げるができる。

4. 中日語彙交渉の研究

語彙交渉、特に中日語彙交渉およびその歴史の研究は中国の研究者が関心を持つテーマの一つである。近年、中国語の新語における日本語由来の単語の著しい増加によって、それを取り上げる研究も増えてきた。次のような論考が見られる。

趙康英「從漢語新詞語看日語對漢語的影響」(『漢日対比語言学研究(協作)会成立大会暨第1届漢日対比語言学研討会資料集』2009)、李錚強「日本語由来の新語の語形について」(『漢日語言対比研究論叢』第1輯、北京大学出版社、2010)や、吳侃・劉志昱「近年日語外来詞對中文的影響」(『日語學習與研究』2010年第3号)、甘涛・李静「從新聞報道看日源新詞在当代漢語中的受容狀況」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)、王瑩「中国語新語における日源新語の使用現状と翻訳についての考察」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)などである。

一方、現代中国語の新語が日本語にどのように受容されているのかを考察した論考として、王志軍「日本書刊中的漢語新詞訳介問題」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)、張穎「日本的漢語新詞傳播現状與問題分析——以電子媒介為中心」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)、孔祥惠「中国語政治新語の日本語訳について」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)、金玺罡「中国語の派生語の新語と日本語訳について」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)などを挙げるができる。

ほかには、馮良珍「日本文献『古事記』的言語動詞研究——兼與『搜神記』『中阿含經』的言語動詞比較」(『漢日対比語言学研究(協作)会成立大

会暨第1届漢日対比語言学研討会資料集』2009)は、日中の文献における言語活動動詞を取り上げて、言語接触に見られる受容と変容を論述した。

鐘少華「從羅存徳『英華字典』看詞語交流建設」(『日語研究』第7輯、商務印書館、2010)は、1866年にドイツ人の宣教師であるロブシャイドによって編纂され香港で出版された『英華字典』が中国ではあまり重要視されなかったのに対し、日本では大いに活用されたというような特殊な言語接触の事例を取り上げている。

なお、王暁「英源外来語的漢日翻譯対比」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)は、翻譯の観点から中日両語における英語由来の外来語の受容の仕方の相違を比較した。

5. その他の対照研究

色彩語の中日対照研究は、従来、研究者の関心の集まるテーマの一つである。黄鶯「漢日顔色詞的文化内涵差異性」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)や汪然「中日顔色詞語義特徵対比分析」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)や林翌「漢日基本顔色詞的語義研究」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)は、文化や意味などの観点から中日両語における色彩語を比較した。

中日両語の忌み言葉の対照研究として、朱棠「中日礼儀文化中“死亡”忌諱語的対比研究」(『第3届漢日対比語言学研討会資料集』2011)、徐瑛「認知言語学の視点から見た日中忌み言葉の対照研究——「排泄・性・死」に関する婉曲表現を中心に」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)が見られる。

陳慧玲「中日流行語受衆意識小考」(『第2届漢日対比語言学研討会資料集』2010)は、流行語の受容のあり方をめぐって言語使用者の意識の観点から、アンケート調査を行った結果、日本語母語話者のほとんどが流行語の文章語への使用に抵抗を感じているのに対し、中国語の母語話者の多くは適度の使用を容認しているという中日両語の相違を明らかにした。